

〈研究論文〉

W. G. アストンの『日本口語文典』における名詞と代名詞 — 『日本口語小文典』第3版と『日本文語文典』との比較から—

吉 田 朋 彦

【要旨】

本稿では、ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 1841-1911) の『日本口語小文典』第3版と『日本口語文典』(「第4版」) の構成と品詞分類、名詞と代名詞の記述の変化を考察した。その過程で、『日本文語文典』第2版の影響も検討した。その結果明らかになったことは次の通りである。(1) 品詞分類は第3版の性格が保持され、日本語学習者向けの文法書の性格が残っている。(2) 語に品詞を割り当てるときの難点は、一つの語が複数の品詞となり得ることである。(3) 名詞と小辞の記述から、日本語の膠着語としての性格が明らかになりつつある。(4) 『日本文語文典』第2版の内容(例えば派生名詞)が随所に取り込まれている。これらの一般的な傾向の他、大きな改訂があった指示詞の記述についても検討した。その結果、内容の変更はあったが、しかし、指示詞の基本的特徴は第3版と大きく変わらず、コとソ・ア・カの二大対立の上で、ソ・ア・カが特徴づけられていた。また、『日本文語文典』とは異なり、コの記述は「話し手」の概念が明確にされず、ソの記述には「話し相手」の概念を欠くことを指摘した。

キーワード: アストン、日本口語文典、名詞、代名詞、指示詞

1. はじめに

ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 1841-1911) は、文語と口語の双方で優れた文法書を残した。文語文典の初版 *A grammar of the Japanese written language, with a short chrestomathy* は1872年に発行された。その後、1877年に第2版 (Aston, 1877) が、最後の第3版が1904年に刊行された(以下『文語文典』とする)。口語の文法書の初版は、1869年の *A short grammar of the Japanese spoken language* (『日本口語小文典』) である。1871年にその第2版が、1873年には第3版 (Aston, 1873) が刊行された。そして、題名は改められたが「第4版」と記されたアストンの最後の口語文典が *A grammar of the Japanese spoken language* (『日本口語文典』, Aston, 1888) である。筆者は、『日本口語小文典』と『日本口語文典』を調査し、初版から第2版への改訂と第3版から第4版への改訂が大きく、また第2版と第3版は内容に

大きな差が見られないことを確認した上で、名詞と代名詞について、初版から第2版への改訂について考察した(吉田, 2022)。本稿では、『日本口語小文典』第3版と『日本口語文典』を比較し、名詞と代名詞の記述の変化について、『文語文典』第2版の影響を考慮しながら、考察することにする。数詞は、改訂の程度が大きくないことと本稿の紙幅に制限があることから、対象外とした。なお、先行研究に倣い、本文中では『日本口語文典』を「第4版」と、また、『日本口語小文典』と『日本口語文典』をまとめて『口語文典』と呼ぶことにする。

アストン研究の文献は種々のものがあるので、ここでは本研究と関連性の高いもののみ述べておく。本稿と対象が近い研究に古田(2010a)がある。そこでは、『口語文典』の第2版以降と『文語文典』の初版と第2版をもとに、アストンの指示詞の説がいかに形成されたかが論じられている。そのとき、『文語文典』第2版でアストン説が完成するという見解が取られている、その点は本研究のアプローチとは異なる。本研究では、第4版は第3版と連続していて、『文語文典』の影響はあるものの、『口語文典』における指示詞の説の最終形と見る。

古田による研究では、他に品詞分類と動詞の活用形を中心にした考察(古田, 2010b)、敬語の記述の考察(古田, 2010c)がある。また、加藤(1986)は、章構成や品詞論に注目しながら第4版に見られる改訂や特徴について論じている。そこでは、『文語文典』から『口語文典』への影響という視点が見られ、その点は本稿と共通している。ただし、名詞と代名詞については議論がない。今村(2018)は、『口語文典』の4つの版すべてについて、量的な視点から章構成や例文を分析し、第4版になって「Particles(助辞)」が名詞の章から独立したことなどから、内容面ではアストンが日本語の視点から記述するようになったことを指摘している。

2. 構成の変化と改訂の傾向—第3版と第4版の比較—

日本語の記述の大枠は第3版も第4版も同じである。まず、音声・音韻・表記から品詞各論へと、さらに、文の構成法、時間と度量衡、学習者の誤用へと進む。しかし、第3版と第4版の文法記述の中核部分、すなわち、第3版第2章から第11章までと、第4版第2章から第13章までを対照すると、アストンの口語文法の構成が変化したことが見て取れる。表1にあるように、第3版の章はすべて第4版に引き継がれている。そして、第4版で新たに「第2章品詞」と「第8章補助語」、「第9章小辞」、「第11章英語から日本語へ」、「第12章尊敬形と謙讓形」が追加されている。

これらのうち、名詞の記述と関連の深い第2章と第9章からわかることは、第4版が、日本語研究の伝統に影響を受けた『文語文典』第2版の記述を取り入れながらも、なお英語を基礎にした、英語話者の学習者に有用な日本語の文法書という性格を保っていることである(第8章は、題名からはその内容がわかりにくい、第3版の第6章§74以降、すなわち動詞の記述に由来している)。

表1 『日本口語小文典』第3版と『日本口語文典』の章構成

| | 『日本口語小文典』第3版 | 『日本口語文典』 |
|----------------|------------------------------------|--|
| CHAPTER I . | The Alphabet-Pronunciation | Syllabary—Pronunciation. |
| CHAPTER II . | Noun-Particle | Parts of speech. |
| CHAPTER III . | Pronoun | Noun. |
| CHAPTER IV . | Numeral | Pronoun. |
| CHAPTER V . | Adjective | Numeral. |
| CHAPTER VI . | Verb | Verb. |
| CHAPTER VII . | Adverb | Adjective. |
| CHAPTER VIII . | Preposition | Auxiliary words. |
| CHAPTER IX . | Conjunction | Particles. |
| CHAPTER X . | Interjection | Adverbs, Conjunctions, Prepositions and Interjections. |
| CHAPTER XI . | Order of Words in a Sentence | English into Japanese. |
| CHAPTER XII . | Division of Time | Honorific and Humble forms. |
| CHAPTER XIII . | Money, Weights and Measures | Syntax. |
| CHAPTER XIV . | Common Errors in Speaking Japanese | Time, money, weight and measures. |
| CHAPTER XV . | | Errors in speaking Japanese. |
| CHAPTER XVI . | | Extracts. |

出典 『日本口語小文典』第3版、『日本口語文典』から筆者作成

第2章は、日本語の品詞分類についての章である。これは、『口語文典』では新しい内容である。詳しくは3.で述べるが、ここでアストンは、ヨーロッパ諸語の品詞分類と日本語の伝統的分類（「名」「詞」「てにをは」）の相違点を述べながらも、『文語文典』で提案した独自の4分類には踏み込まない。その点で、『文語文典』に比べ、『口語文典』は依然としてヨーロッパ諸語の伝統的な文法が基礎にあり、第3版序文の「日本語の口語の知識を習得したい商人や学生のために書かれた」という性格が残っている。

第9章は、『口語文典』の大きな変化を表す。第3版までは、第2章の題名‘Noun - Particle’に示されているように、小辞は名詞の記述の中で論じられていた。これは、ヨーロッパの文法では、格や数、性の表示が名詞の語形変化として扱われることと並行している。しかし、第4版では、名詞の性・数・格は名詞の記述（第3章）に残されているものの、小辞の詳細は第9章として再編される。これは、第2章の、日本語の名詞に語形変化はない（第4版p. 6）という記述と対応している。そして、それは、アストンの時代の言語学を考慮すれば、フンボルト（Wilhelm von Humboldt）による言語類型論における三分類、つまり屈折語と膠着語、孤立語の区別（Robins, 1997: 166）と重ねることもできる。それゆえ、アストンの記述は、日本語の名

詞を屈折語であるヨーロッパの諸言語からのアナロジーによる記述から、膠着語の性格をより明らかにする記述へと変化したと考えられる。その点で、『口語文典』第3版と第4版の差は大きい。

以下、本稿の目的と異なる箇所について、第4版の傾向に関することを述べておく。第3版第5章「形容詞」は、第4版では第7章、つまり動詞の記述の直後に置かれる。これには、形容詞と動詞の共通性を明確にした結果という見解がある（今村，2018：33-34）。第7章では、形容詞の活用が示されたあと、形容詞の活用と動詞の活用が本質的には同じであることが指摘される（第4版p. 93）。そして、『文語文典』第2版第4章「活用する主要語」では、動詞と形容詞の活用がまとめて述べられている。それゆえ、第4版での形容詞の扱いは、第3版までの考えを崩し、『文語文典』の成果を承けたものである。

第11章では、英語の接続詞と助動詞、前置詞‘to’、動詞‘think’と‘want’が日本語ではどのように表現されるかが述べられている。そのうち接続詞については、第3版第9章の内容と同等であり、すべてが新しいものではない。しかし、「英語から日本語へ」という章題が示す通り、英語話者にとっての英和辞典的な性格があり、『口語文典』第3版までの性格を引き継いでいると見ることができる。

第12章の主たる内容は、名詞・代名詞・動詞の尊敬形と謙譲形、尊敬と謙譲の接頭辞と接尾辞である。これらは、第4版で初めて現れたのではなく、『文語文典』と『口語文典』からまとめられたものである。具体的には、ここで名詞・代名詞（実際には、話者と関連のある人物を指す名詞が多い）として扱われた語には、『文語文典』第2版第3章の一人称・二人称人代名詞の記述で挙げられた語もある。また、尊敬の接頭辞の記述は、『口語文典』第3版第6章のナサルナルの記述（pp. 67-68）と、『文語文典』第2版第3章の「尊敬の接頭辞（Honorific Prefixes）」と題された節にある（pp. 52-53）。さらに、謙譲の接頭辞は、同章の節「謙譲の接頭辞（Humble Prefixes）」（pp. 53-54）にもある。それゆえ、この第12章は、第3版と『文語文典』第2版で散在していた記述を、アーネスト・サトウの『会話篇』の例も用いながら（p. 167）、新たにまとめ直したものである。

3. 『日本口語文典』第2章から見えること

2. で述べた通り、第2章は新たに追加された章である。この章は2節で構成され、最初の§5（pp. 5-6）ではヨーロッパの言語と日本語の品詞の概念の違いが、§6（p. 6）では日本語の各品詞の特徴が述べられる。この章から見えてくることは、ヨーロッパの文法で日本語を記述することの難しさの一端と、『文語文典』との違いである。

一般的に、言語が異なれば品詞分類も異なることはあり得る。しかし、第2章からは、別の難点が見える。それは、1つの語が複数の品詞として用いられるという点である。その点について§5を追うと、まず、ヨーロッパの言語では、品詞は、「語形変化の形態（the form

of inflection)」と、「その統語的關係 (their syntactical relations)」によって決定され、そのためある語は1つの品詞にしか属さないという。ただし、「分詞 (participle)」は、例外的に、動詞と、名詞あるいは形容詞の性質を兼ね備えたとする。しかし、対照的に、日本語ではこの規則と例外の關係が正反対である。それを述べた箇所は以下の通りである。

Here it is rather the rule than the exception that a word with or even without a change of inflection can be converted at pleasure into a verb, an adjective or a noun. (p. 5)

ここ [=日本語] では、語形変化がある語でも、あるいは語形変化がない語できても、自在に、動詞や形容詞、名詞に轉換しうるということが例外というより規則である。(引用者訳)

その例は「行く」である。アストンは、「すぐに行く」「行くがよろしい」「行く人がある」では、「行く」が、それぞれ動詞、名詞、形容詞として用いられることを示す (p. 6)。そして § 6 でも、副詞という独立した語類はなく、形容詞や名詞、動詞から作られるとする (p. 6)。

これは、ある語がどのような品詞であるかという問題とも、ある概念がどのような品詞の語で表されるかという問題とも異なる。例えば、英語には ‘green’ という名詞と形容詞はあるが、日本語には「緑」という形容詞はない。一方、上記の箇所でアストンが述べているのは、一つの語でありながら、そしてその語が西洋の基準からいえば語形変化という特徴を有しているながら、品詞が一つに定まらないということである。そして、後述するように、このことが代名詞の記述にも現れる。

次に、『文語文典』と比較した『口語文典』の特徴に、アストンが『文語文典』で提示した独自の4分類を採るかどうかがある。§ 5の末尾でアストンは、日本の伝統的な分類「名」と「詞」、「てにをは」に言及し、日本の文法研究者が語をこのように分類することによって、1つの語が複数の品詞に分類されることを回避するという (p. 6)。しかし、『文語文典』で見られた独自4分類、すなわち「活用する／しない主要語」「活用する／しない従属語」は用いない。

さらに、§ 6 (p. 6) で述べられる各品詞の特徴からも、『文語文典』の影響が透けて見えるものの、明示されていないことがわかる。そこでは、名詞と代名詞、数詞は活用がない語としてひとまとまりに扱われる。また、動詞と形容詞は、類似した語形変化があり、実際には1つの品詞とみなしてよいとされる。その他、冠詞がないこと、「前置詞」と接続詞は主に小辞としてまとめられること、副詞という独立した語類はないことが述べられる。この記述から、『文語文典』の分類との類似性が読み取れる。すなわち、名詞と代名詞、数詞には「活用のない主要語」が相当し、動詞と形容詞には「活用のある主要語」が、そして「前置詞」と接続詞には「活用のない従属語」が相当する。ただし、「活用のある従属語」に相当する品詞についての言及がない。それは、第8章で扱われる「補助語 (auxiliary words)」の一部 (補助動詞のイル・

オルや、ダ・デアなど)だと考えられるのだが、何の言及もない(第8章の本文でも「活用のある従属語」への言及はない)。それゆえ、第4版では、『文語文典』での独自の品詞分類が基底にありながら、ヨーロッパの伝統文法の品詞を枠組みとして維持していると考えられる。そしてそのことから、『口語文典』の初版から第3版の序文で明記された性質、つまり日本語を学ぶ学生や商人が使うことを意図しているということが消え去ったわけではないと言える。

4. 名詞の記述

4.1 名詞の内部構造

名詞の章の構成は、第3版(第2章)と第4版(第3章)で異なる。第3版はいわゆる単純語の名詞の記述(§4～§12)と複合名詞の記述(§13)から成っている。一方、第4版は、これらに派生名詞(§12)が追加される。さらに、大きな改訂が名詞と複合名詞の双方に加えられているので、名詞の章は第4版で大きく変わったことになる。そこで、本節で名詞の論を、次節で複合名詞と派生名詞について述べることにする。

単純語の名詞の基本構造は、第3版ではヨーロッパの文法の範囲内でなされる。一方、第4版では、その枠組みは維持されながら、小辞などそこに収まらない部分をそれとして記述する傾向にある。

まず、アストンの記述に見られる文法の枠組みとは、(1)名詞は語形変化があり、それによって(2)性、(3)数、(4)格を表すというものである。

(1)については、日本語には語形変化がないこと、そしてその代わりに性・数・格は小辞が表すことが指摘される(第3版p.2、第4版p.7)。(2)については、第3版(pp.2-3)でも第4版(p.7)でも、日本語には性の区別がないとされる(例「牛」「馬」。ただし、接頭辞「オ」「オン」と「メ」「メン」で性が区別されるという)。例外は、「息子」と「娘」、「父」と「母」である。以上は第3版と第4版に共通である。

一方、相違点は、まず、第4版では、上記のオ・オンとメ・メンによる性の区別が述べられたあと、これらを用いる語は複合名詞であること(「男の子」「女の子」)が補足されたことである(p.7)。また、§11の複合名詞の記述の最後で、性を表す接頭辞(と敬語の接頭辞)が複合語を形成することが注記される(p.10)それゆえ、アストンが第3版までで維持していた、性の区別が接頭辞あるいは小辞によって表される、つまり一つの名詞の内部構造の変化(語形変化)によって性の区別がなされるという考えは、概ね放棄されたことになる。

例外は「息子」「娘」「父」「母」である。そのうち、「息子」と「娘」は、現代では、語源からムスコとムスメは、「ムス+{コ/メ}」という構造を持つとされる(『日本国語大辞典』)。しかし、アストンがこのような構造を念頭に置いて、コとメの交代を語形変化とみていたという記述は見られなかった。

(3)について第3版と第4版を比較すると、扱われた言語事実は同じでも、複数の表示の

位置づけが変わる。当該の節（第3版 § 6、第4版 § 9）の要点は2つである。一つは、日本語では単数と複数は、原則として区別されないが、区別が必要なラヤガタなどの小辞（4版では「シュウ（衆）」が追加されている）を用いて複数を表示することができるということである。もう一つは、第4版では版組みの都合なのか、小さな文字で記されているが、「品」と「品々」などいわゆる疊語による複数の表示とその意味である（第3版 p. 3、第4版 pp. 7-8）。この2点は共通している。

しかし、第4版では、複数を表す小辞は、第9章で記述されるという追加がある（p. 7）。そして、第9章では、小辞の定義が明確にされる（p. 118）。

Particles have very varied uses in Japanese. They serve instead of case and plural terminations, and are also used as prepositions and conjunctions. (Aston, 1888: 118)

小辞には日本語では非常に多様な用法がある。小辞は、格と複数の語尾の代わりとしてはたらき、前置詞と接続詞としても用いられる。（引用者訳）

この箇所から明らかなように、アストンは名詞の複数の表示を、語形変化とはみなしていない。ここから、第4版になって、名詞について、日本語の膠着語としての性格が明確になったと見ることができる。

第9章での小辞の新定義に合わせるかのように、(4)格の記述も大きく変わる。記述のしかたという点では、第3版は第2章 § 7～§ 12で小辞を列挙し、それぞれの文法的機能を記述している。扱われた小辞は、ハ・ノ・ガ・ニ・ヲ・デ・カ（終助詞）・モ・デモ・カラ・ヨリ・マデで、そのうち格を表すとされるのは、ノ（所有格）、ガ（所有格、主格）、ヲ（対象格（objective case））である。これら以外では、ハが分離する機能がある小辞（p. 3）と定義されるのを除けば、小辞は英訳が与えられるだけである。

一方、第4版では、§ 10が「格」と題される（第3版では節題はなかった）。その内容は三つある。概略すれば、日本語の名詞に西洋的な意味での格がないことと、ヨーロッパの文法の格と日本語、そして複数形の文法、すなわち複数を表す語尾（termination）が名詞と小辞の間に置かれること、である。

第4版の特徴をよく表すのは最初の二つである。記述のしかたとしては、伝統文法の8種類の格¹を挙げ、それらが日本語ではどのように表されるかを中心に据えている。つまり、ヨーロッパの文法の格を基準とし、その格が日本語でどのように表わされるかを示している。しかし、§ 10の冒頭では、アストンが、日本語の膠着語的性質、つまり語形変化を起こさず小辞が名詞の後ろに連なっていく性質を記述していることを明示している。以下、該当箇所を引用する。

Properly speaking, Japanese nouns have no cases, but a declension can be made out for them by the help of certain particles, as follows:— (p. 8)

正確に言えば、日本語の名詞には格がないが、しかし、一つの屈折の型は、次に示すように、いくつかの小辞の助けを借りて、格を表すために作られることが可能である。(引用者訳)

ここで、上述した(1)、つまり第3版ですでに日本語には語形変化がないことが記されていることを考慮すると、第3版と第4版の違いが見えてくる。第3版と第4版は、語形変化による格表示がないことを認めているという点は共通している。しかし、第3版は、小辞を名詞とともに提示し、名詞と小辞という一つのまとまりが表す意味を記述していた。それに対し、第4版は、ヨーロッパの文法の屈折と日本語の名詞と小辞の結合形を分離した上で、格が日本語でいかに表されるかという問題と、小辞各々の記述という問題を立て、それぞれに応じる記述を与えている。それゆえ、単純語としての名詞の内部構造の記述が、屈折語の特徴ではなく、膠着語の特徴を備えていることを明示するようになったと見ることができる。

4.2 複合名詞と派生名詞

第3版では§13が「複合名詞の諸例 (Examples of Compound nouns)」と題され、複合名詞の分類と、複合名詞の音韻変化が扱われる (p. 8)。

まず複合名詞の分類を比較すると、第3版の複合名詞の分類は、すべて2語から成る場合についてで、分類の基準は前項名詞と後項名詞が何に由来するかである。具体的には、(1) 二つの名詞で構成される場合 (例「風車」)、(2) 形容詞の語根 (root) と名詞で構成される場合 (「あかがね」)、(3) 名詞と動詞の語根で形成される場合 (「物知り」)、(4) 動詞の語根と名詞で構成される場合 (「売り物」)、である。

第4版 (§11) でも、同じく2語から成る複合名詞が扱われる。また、上記の四つの分類も変わらない (ただし、「語根 (root)」ではなく、「語基 (stem)」が用いられている)。そして、さらに二つの分類、すなわち(5) 形容詞の語基と動詞の語基で構成される場合 (「丸飲み」²⁾ と(6) 動詞の語基二つで構成される場合 (「引出し」) が追加された。

この(5)と(6)は、『文語文典』第2版には記載がない。(1)から(4)までは、『文語文典』第2版にも同等の記述がある (p. 51)。そこでの分類は5分類で、(7) 二つの名詞で構成される場合 (「風車」)、(8) 形容詞の語根と名詞で構成される場合 (「あかがね」)、(9) 名詞と形容詞の語根で構成される場合 (「ともぶと」)、(10) 動詞の語根と名詞で構成される場合 (「乗り物」)、(11) 名詞と動詞の語根で構成される場合 (「物知り」) である。それゆえ、(1) — (7)、(2) — (8)、(3) — (11)、(4) — (10) という対応があり (『文語文典』の(9)は『口語文典』にはない)、(5)と(6)は第4版で新たに付け加えられた分類なのである。

複合名詞の音韻変化は、第3版から第4版への大きな改訂はない。どちらも、後項の語頭の濁音化と前項の語末母音の変化について述べている。相違点は、濁音化のタイプの追加である。第3版では、濁音化は/k/から/g/への変化しか挙げられていなかった。それが第4版で

は、/f/から/b/への変化（「小舟」）が追加された。

派生名詞は、第4版 § 12 (p. 10) で述べられる。この節は新たに追加された節で、第3版にはない。主な点は3点で、(1) 抽象名詞が形容詞語基と接尾辞「さ」によって構成されること（例「高さ」）と、(2) 形容詞+「こと」も同様に用いられ、ある性質の程度を示すこと（「高いこと」）、(3) 動詞と形容詞の語基から名詞が派生すること（「残り」「白」）、である。

このうち(1)と(3)は『文語文典』第2版第3章にも見られる (pp. 47-50)。ただし、ここでは、動詞語根からの派生と形容詞語根からの派生の順で記述され、扱われる接尾辞は「み」「さ」「ら」「げ」「け」「か」と豊富である。また、頁数からわかるとおり記述量は『文語文典』の方がはるかに多い。

以上から、複合名詞と派生名詞の改訂では、『文語文典』との関係は認められることが明らかになった。しかし、第4版全体の傾向に通じる改訂は見られなかった。

5. 代名詞の記述

5.1 「代名詞」の構成

代名詞の記述（第3版第3章、第4版第4章）は内容が大きく改変された。節の構成は表2に示すとおりで、9節構成から17節構成となった。また、頁数も9頁から23頁へと大幅に増加している。扱われた事項は基本的には同じで、人代名詞、所有代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、不定代名詞、再帰代名詞、関係代名詞が記述の対象である。第4版ではこれらに加えて、「ひと」や「みな」など代名詞相当語が § 29 に集約されている。

表2 『日本口語小文典』第3版と『日本口語文典』第4章の構成

| 『日本口語小文典』第3版第3章 | | 『日本口語文典』第4章 | |
|-----------------|----------------------------------|-------------|--|
| § 14 | [一人称人代名詞] * ¹ | § 13 | [一人称人代名詞] |
| § 15 | [二人称人代名詞] | § 14 | [二人称人代名詞] |
| § 16 | [三人称人代名詞] | § 15 | [三人称人代名詞] |
| § 17 | [人代名詞の用法、所有代名詞] | § 16 | [人代名詞の用法] |
| § 18 | DEMONSTRATIVE PRONOUNS. 指示代名詞 | § 17 | [所有代名詞] |
| § 19 | INTERROGATIVE PRONOUNS. 疑問代名詞 | § 18 | DEMONSTRATIVE AND INTERROGATIVE PRONOUNS. 指示・疑問代名詞 |
| § 20 | INDEFINITE PRONOUNS. 不定代名詞 | § 19 | <i>Ko, ka, 'this.'</i> コ、カ、'this' |
| § 21 | REFLECTIVE PRONOUNS. 再帰代名詞 | § 20 | <i>Sa or so 'that.'</i> サやソ 'that' |

| | | | |
|------|-----------------------------|------|--|
| § 22 | RELATIVE PRONOUNS. 関係代名詞 | § 21 | <i>A</i> 'that.' ア 'that' |
| | | § 22 | <i>Ka</i> , 'that.' カ、'that' |
| | | § 23 | <i>Da</i> , 'who.' ダ、'who' |
| | | § 24 | <i>Do</i> , 'which.' ド、'which' |
| | | § 25 | <i>Na</i> , 'what.' ナ、'what' |
| | | § 26 | INDEFINITE PRONOUNS. 不定代名詞 |
| | | § 27 | REFLEXIVE PRONOUNS. 再帰代名詞 |
| | | § 28 | RELATIVE PRONOUNS. 関係代名詞 |
| | | § 29 | OTHER PRONOMINAL WORDS:— その他の代名詞的な語 |

*1 節題がないものには、引用者が内容を現代の用語で付した。

出典 アストン『日本口語小文典』第3版第3章、『日本語文典』第4章をもとに筆者作成

これらの事項の中でも指示代名詞と疑問代名詞の記述は大幅に充実した。§ 18は指示代名詞と疑問代名詞の一覧表のみである。しかし、この表は『文語文典』にはないもので、ここで語の形態と意味の関係が集約されている。そして、指示代名詞も疑問代名詞も § 19以降で語根ごとに記述されるなど、内容の拡充には『文語文典』の影響が見られる。以下、人代名詞と指示代名詞、疑問代名詞・不定代名詞、再帰代名詞・関係代名詞・その他の代名詞的な語の順で、第4版に加えられた改訂を検討する。

5.2 人代名詞

5.2.1 一人称人代名詞

第4版の一人称人代名詞の記述は、ワタクシ [ワタクシドモ] とオレ [オレラ]、テマエを中心になされていて、この点は第3版と変わらない。扱われた語は大幅に増え、第3版がこれら3語とその複数形、そしてワタシ、ワシの合計5語だったのに対し、第4版では、ボク、ワガハイ、ワタイ、ワッチ、セツシャ、オイラ、ジブン（自分）が追加され、合計12語になった。それに伴い、例文数も2文から10文へと増加している。

用法の記述の改訂は3点ある。第一に、オレ [オレラ] が「敬意がない (less respectful)」、「クーリーの間で用いられる」(第3版p. 9、第4版p. 11) とされるのは同じだが、第4版では、目下の者に対して用いた場合は「やや横柄な語 (a somewhat haughty word)」であるという

記述が付け加えられた (p. 11)。

第二に、テマエの記述が、第3版では‘a respectful word’とされていたのに対し、第4版では‘a humble word’に書き換えられた。これについては、古田 (2010c) の論考があり、第3版では‘humble’と‘humility’が人代名詞の記述に用いられていないこと、また、‘humble’と‘respectful’が「方向が相手に対するものなのか、自分に対するものなのかという観点の違い」があることが指摘されている (p. 326)。このことから、第4版ではアストンの敬語の概念がより精緻になったと思われるが、アストンの敬語論は本稿の対象外なので事実の指摘にとどめておく。

第三に、テマエの記述の直後に、やや唐突に、一人称人代名詞 (the personal pronoun of the first person) の代わりに、名字が用いられることがあることが追加される。これは、短いながらも、語が複数の品詞にまたがるという点で品詞分類について述べられた内容と合致している。

5. 2. 2 二人称人代名詞

二人称人代名詞もまた、扱われた語と例文数の増加が見られる。第3版でここに分類された語は、アナタ [アナタガタ]、オマエ [オマエガタ]、オマエサン、キサマ、テマエ、キミ、センセイ、ダンナ、ダンナサマの9語である。一方、第4版では、ダンナ・ダンナサマの箇所にダンナサンが追加され、また、新たに一段落が設けられて、コナタ、ソナタ、ソノホウ、ソチ、ヌシ、オヌシ、ワレ、ウヌ、ソッカ (足下) が追加され、合計19語になった。追加された9語には、‘familiar’ ‘formal’ ‘to inferior’ など、親しさの程度や文体の形式性の程度、話者と相手の関係が簡潔に記載されている。例文は4文から、12文に増加している。

各語の記述には、冒頭に ‘The personal pronoun of the second person differs according to the rank of the person addressed.’ (p. 12) とあるように、話者と相手の関係が含まれている。例えば、‘*Omaye san* is almost the same as *anata*, but more familiar, and is used chiefly by women.’ (第3版 pp. 9-10、第4版 p. 13) のようにである。この点に関する第4版の改訂は二つしかない。一つは、キサマとテマエが、話し方が「侮蔑的な (contemptuous)」ときに用いられるとされていたのが、「親しげな (familiar)」に訂正されたことである。もう一つは、下僕から主人に対して、アナタは滅多に用いないということが追記されたことである。この二つの改訂は、ある語が、誰から誰に用いられ、どのような意味を持つかという、語の用法の対人関係的な要素を強化したもので、一人称人代名詞の記述と同じ傾向にある。

この他に、代名詞の体系に関わる補訂もある。それは、アナタが、三人称の代名詞だという主張である。

Anata, for *ano kata* ‘that side,’ (plur. *anata gata*) is properly a pronoun of the third person but like the German *Sie* has come to be used for the second. (p. 12)

第3版までは、各人称の人代名詞の由来については何も述べていない。それゆえ、人代名詞は固定されたものとして記述されていた。しかし、第4版では、『文語文典』第2版に見られたように、ある人代名詞が別の代名詞に由来する、あるいは関係するという考えが明確にされた。これは、日本語の品詞分類の困難さに関わる改訂点である。

5. 2. 3 三人称人代名詞

第3版では、三人称人代名詞（アストンの表現に従えば「三人称代名詞（the pronoun of the third person）」）は、アレ [アレラ]、アノヒトと、アノオカタ、アノオンナである（p. 10）。同頁で、アレには性がないとあり、これは、英語など三人称代名詞に性の区別がある言語を念頭に置いているように見える。例文は3文である。その中には、アレが人を指す例文はあるが、物事を指す例文はない。

第4版の記述（pp. 14-15）は、第3版の内容をほぼ継承していて、本文中の訂正箇所は以下の通りである。

It is often replaced by the more polite form *ano hito*, that man or that woman; (第3版 p. 10)

It is often replaced for persons by the more polite form *ano hito*, ‘that man’ or ‘that woman;’
(第4版 p. 14、下線部引用者)

おそらく、英語のように三人称代名詞に人を指す語とものごとを指す語が混在している言語の話者から見れば、第4版の方がより丁寧な記述であろう。そして、例文数は、3文と変わらず、語彙に時代の変化に合わせた訂正（例えば「岡つ引き」が「巡査」に）が施された以外の変更はない。

一方、語彙は追加され、アイツ [アイツラ] (contemptuous)、カレ [カレラ] (educated people, book language)、トウニン (当人)、イッケン (一見、sly emphasis) の4語が語の特徴とともに加えられた。

三人称人代名詞の記述には、『文語文典』第2版と異なり、指示詞代名詞との関連についての言及がない。『文語文典』では、カレやアレなどは、指示代名詞であるとされる（第2版、p. 66）。それとは対照的に、第4版では語の用法に沿った記述のみとなっている。

5. 2. 4 人代名詞の用法と所有代名詞

三人称人代名詞の記述に続いて、題名のない節（第3版 § 17、第4版 § 16）がある。第3版では、ここで人代名詞と所有代名詞がまとめて述べられていた。それが第4版では分離し、所有代名詞は § 17となる。

第3版 § 17の前半と第4版 § 16を比較すると、第3版の内容に訂正が加えられ、また、その前後に新たな記述が追加されたことがわかる。両版に共通する点は、代名詞の文法（名詞と

変わらず、小辞を後接させること。第3版p. 11、第4版 p. 15) と、代名詞の使用の制限（曖昧さがなくときや代名詞に強調が置かれなときを除けば省略可能であることと、ヨーロッパ人の代名詞の濫用についての注意。第3版p. 11、第4版p. 15) である。

次に、第4版で書き加えられたことはこの二つに關係する。代名詞の文法については、人代名詞とされる語は、§ 13から § 15までで扱われた語だけではないこと、そしてほとんどのヨーロッパ人にとって、ワタクシなど限られた語彙以外を使う機会はほとんどないことである。さらに、一人称と二人称の人代名詞については、名詞と異なり、複数の小辞を付けることが規則であることと、一人称単数でも複数を用いることである (p. 15)。この複数の小辞に関する規則を除けば、改訂箇所は非母語話者向けの内容で、第3版までの性格を受け継いでいる。

改訂のもう一つの点、つまり代名詞の使用の制限についての内容も、非母語話者向けの内容である。一つは省略についてで、日本語では人称を尊敬と謙讓の表現によって表す方が好まれるということである。もう一つは、人代名詞の濫用の例は会話の手引きの価値を損なうほどのもの (p. 16)、つまり日本語の実態からかけ離れたものだという記述である。

これらは、日本語の文法でもあり語用論でもある。第3版では、人代名詞の省略がどのような場合に生じるかという記述にとどまっていたのに対し、第4版では、なぜ人代名詞を用いる必要がないか、あるいは、人代名詞がなくても解釈に不都合がないのはなぜかという疑問に答えていると見られるからである。そして、そこには、『口語文典』に共通する、外から見た日本語という視点が窺える。

所有代名詞の記述の中心部分に変更はない。第3版 (p. 11) では、日本語では所有代名詞は、所有の小辞であるノかがを付加することによって作られるという趣旨の内容があるだけである。第4版では、その箇所に変更はなく、そのあとに、「人称代名詞+ {ノ／ガ}」が所有代名詞なのか人称代名詞なのかは、付随する小辞と文脈によって区別されると述べられている (p. 16)。これを、前節と同じく、文法から語用論的な説明に発展していると見ることができる。

5. 3 指示代名詞の記述

5. 3. 1 第3版における指示代名詞

指示代名詞の記述は第4版になって大きく書き換えられた。本項では第3版を概観し、次項で第4版について述べる。第3版では、「指示代名詞」は、コレ・コノ、ソレ・ソノ、アレ・アノに限られていた。記述の主な観点は、①英訳、②品詞、③文法、④人称、⑤指示対象、⑥談話上の機能である (表3)。

表3 『日本口語小文典』第3版における指示代名詞の特徴

| | コレ | コノ | ソレ | ソノ | アレ | アノ |
|--------|------|------|------|------|------|------|
| ①英訳 | this | this | that | that | that | that |
| ②品詞 | 名詞 | 形容詞 | 名詞 | 形容詞 | 名詞 | 形容詞 |
| ③文法 | 単独 | 名詞修飾 | 単独 | 名詞修飾 | | |
| ④人称 | | | 二人称 | 二人称 | 三人称 | 三人称 |
| ⑤指示対象 | | | A | | B | |
| ⑥談話的機能 | | | | | C | |

A 話者の目の前にあるもの、会話の当面の主題

B 少し離れたもの、あるいは見えないもの。会話の当面の主題以外。

C 文がアノで始まることがしばしばある。このアノは話し相手の注意を引く働きしかない。

出典 『日本口語小文典』第3版第3章 § 18から作成

④は、『口語文典』第2版に始まるアストン独自の分類で、指示代名詞に、人代名詞と同様の人称が区別される。ただし、第3版でもコレ・コノには人称の区別が記されていない。

⑤は、指示詞の記述の要点である。コレ・コノの特徴は明確にされず、それを示すものは‘this’しかない。一方、ソレ・ソノは、「話者の目の前にあるもの」「会話の当面の主題(immediate subject)」を指すとされる(p. 13)。ただし、現代の研究にある「話し相手の近くにあるものを指す」というソ系の特徴は明言されず、本文中で「ソノムマ(sono mūma)」を‘that horse, the horse you are riding, which you have bought or of which we are speaking’(p. 13)と英語で解釈が述べられるにとどまる。そして、アレ・アノの特徴は、「少し離れたもの、あるいは見えないもの」「会話の当面の主題以外」とされる(p. 13)。ここから、アストンはソレ・ソノとアレ・アノを相補的な意味を持つと捉えていることがわかる。それゆえ、第3版で記述された指示代名詞の体系は、コレ・コノ(‘this’)とソレ・ソノ・アレ・アノ(‘that’)という二分類があり、さらに‘that’に相当するソレ・ソノとアレ・アノを上記のように特徴づけていると見ることができる。

5. 3. 2 第4版における指示代名詞

5. 3. 2. 1 指示代名詞と疑問代名詞の一覧表

第4版の大きな改訂の一つが、§ 18(p. 18)である。この節には、指示詞と疑問代名詞の一覧表しかない。そこでは、新たにカ系(カ、カレ、カノ)を加えた指示代名詞と、ダ・ド・ナで始まる疑問詞が、英訳の下に整理されている。例えば、‘This’の下に、「コ・カ(語根)」「コレ(名詞)」「コノ(形容詞)」のように列挙される³。また、各系に属する語も増え、例えばコ系には、コナタ・ココ・コチ・コンナ・コンナニ・コイツ・カヨー・カホド・カク・コーが記載されている(5. 3. 2. 2参照)。

そして、表の趣旨についてアストンは次のように述べる。

The above table gives along with the Demonstrative and Interrogative pronouns a number of words which it is convenient to consider at the same time, as being associated with them in meaning and derivation. Most of them are in very common use. (第4版 p. 18)

上の表は、指示代名詞と疑問代名詞と併せて、意味と派生についてそれらと関連があるがゆえに一緒に考えるのが都合がよい多くの語を示している。それらのほとんどは非常によく用いられる。(引用者訳)

実際、表では、各項目の先頭に「語根 (root)」が記されている。例えばコ系ではコとカ、ソ系ではソとサである。このような、記述を語根から始める提示方法は、『口語文典』では第3版までには見られず、『文語文典』第2版の当該箇所 (p. 67ff) に見られる特徴である。

指示代名詞の英訳、つまり列の先頭、には、人称の区分が添えられている。ソ系には ‘That (2nd. person)’、ア系とカ系には ‘That (3rd. person)’ とある。これは、第3版における指示代名詞の位置づけ、すなわちソ系は「二人称の指示代名詞 (the demonstrative pronoun of the second person)」、ア系は「三人称の指示代名詞」(第3版 p. 13) と同じである。コ系の人称表示は一覧表からは脱落している。しかし、§ 21で、コレは「一人称の指示代名詞 (the demonstrative pronoun of the first person)」とされる (p. 23)。この、コ・ソ・ア・カの人称による分類は、『文語文典』第2版にあり (p. 68)、その成果を取り入れたものと考えられる。

5. 3. 2. 2 指示代名詞各系の記述—第3版との共通点と相違点

§ 19から§ 22までが各系の指示詞の記述である。ここでは、系ごとに記述がなされるのではなく、初めに§ 19でコ系の語根とコ系に属する語彙が概ね記述される。そして、その内容と§ 18の一覧表でソ系以降を代表するという形をとっている。さらに、§ 21のア系の記述の中で、コ・ソ・アの各系の特徴と相違点がまとめて述べられる。

§ 18から§ 21を見ると、コレ・コノとそれに対応する他の系の記述の視点とその内容は、基本的に第3版と同じである。これを表3に沿って述べると、次のようになる。「①英訳」では、カ系に ‘that’ が充てられた以外に変更はない。「②品詞」も、コレ・コノなど第3版に見られる語に改変はない。「③文法」は、§ 20のソ系の記述 (p. 21) に、第3版の当該箇所 (p. 12) と同等の文があり、内容に変化はない。「④人称」では、ソ系・ア系が二人称と三人称とされる点に変更はない。

一方、第3版と第4版の相違点は、指示代名詞の縮約形と、コ系と人称の関係付け、語彙の増加である。さらに、表3「⑤指示対象」「⑥談話的機能」の記述にも若干の改訂は見られるが、それは5. 3. 2. 3で述べることにする。

まず、縮約形については、コレ・ソレ・アレにハが続いたとき、「コリヤ」「コラー」などと

発音されるということが指摘されている (p. 19)。

コ系と人称の関係は、§ 18の一覧表ではなく、§ 21で述べられる。そこで、コレが「一人称の指示代名詞 (the demonstrative pronoun of the first person)」とされるのである (p. 23)。それによって、第3版で欠けていて、『文語文典』第2版 (p. 68) には明記されていた関係が補充された。

新たに追加された語は、コ系のコナタ・ココ・コチ・コンナ・コンナニ・コイツ・カヨー・カホド・カク・コーであり、これらに相当する語がソ系・ア系・カ系にある場合、一覧表にその記載がある。これら新規追加語にはすべて英訳があり、さらに、コナタ・ソナタ・アナタとコンナニ・ソンナニ・アンナニはそれぞれ代名詞と副詞と品詞の記載もある (§ 18, p. 18)。

そして、これらの語のうち、第3版では副詞として記載された語がある (第3版 p. 72)。それは、ココ・コチ・コー・カヨーと、それに相当するソ系・ア系 (さらにド系) である。こうした整理は、3. で述べたように、日本語では語が複数の品詞に属するという認識に基づいて加えられた訂正と言える。

5. 3. 2. 3 指示代名詞の各系の記述—第4版の特徴

第4版では、コ系とソ系、ア系に、カ系も追加された。コ系の記述は、基本的に第3版と同じで、特徴が明確にされないままである。確かに、第4版では、コレが‘this thing’を意味する名詞であり、‘this person’も表すとされ、事物と人を表すという特徴は明確になった (p. 19)。しかし、コレがフランス語の‘ceci’に、コノが‘ce’‘cette’‘ces’に相当するという一文はあっても (p. 19)、また、第4版でコレとコノがイタリア語の‘questo’に相当する (p. 23) という記述が追加されても、他の系に対するコレ・コノ独自の特徴が明示されていない。それは、『文語文典』第2版で、「話し手の近くあるいは話し手に属するものごと」を指すという記述がなされている (p. 68) のとは対照的である。つまり、第4版のコ系は、「話し手」の概念が‘this’によって示唆されるに止まっているのである。

ソレとソノの記述は、第3版で「話者の目の前にあるもの」「会話の当面の主題」を指すとされ (p. 13)、さらに第4版では「話者の心中 (in mind) にあるもの」 (p. 23) が追加される。これらは、『文語文典』第2版の記述、すなわち、ソ・ソレ・ソノは「話し相手の近くにあるもの」と会話の中での「言及されたばかりのもので、話し相手の心中にあるもの」を指す (p. 68) という記述とは対照的である。それゆえ、第3版でも第4版でも、つまり『口語文典』では一貫して、ソ系の特徴に「話し相手」という概念はないのである。

アレとアノの記述では、第3版でも第4版でも「少し離れたところにあるもの、あるいは見えない (not in sight) もの」という記述は同じだが、第3版の「会話の当面の主題以外」 (p. 13) が「新しい主題が始められたときに用いられる」 (p. 23) と変更されている。

カ系は第4版で追加され、§ 22にまとめられている (p. 25)。その記述は簡素で、まず、ア系と同じ意味を持つとされる。しかし、ア系ほど広く用いられず、教養のある人に限られること

が指摘される。また、文体は書き言葉 (the book language) で、‘a certain’ の意味も持つことがあるとされる。これらの特徴は『文語文典』第2版66-67頁、69-70頁の記載とほぼ同じである。

以上から、第4版での指示詞の体系が明らかになる。ただし、カ系は記述も例文も少ないためア系と全く同等かどうか判断がつかないので、コ系・ソ系・ア系に限定しておく。

まず、依然として、コ系とソ系の区別は明瞭ではない。アストンの例文 (例えば「これはいくら?」 ‘How much is this?’ 第4版 p. 20) から明らかなように、コレ・コノが指す事物は話者の目の前にあり、英語なら ‘this’ で指示される。しかし、ソ系にも「話者の目の前にあるもの」という特徴があるため、結局、コ系とソ系の違いは、明瞭にされないまま、‘this’ と ‘that’ の違いに帰着してしまう。その原因は、「話し手」と「話し相手」が特徴の中に明示されていないことである。

そして、ソ系とア系は、話者の眼前にあるか否かと、会話の主題の種類という点で対立する。この対立に関する例文を下に示す。

(1) 話者の目の前のソ

(a) その馬 (sono mūma) ‘that horse’ ‘the horse you are riding’ (p. 23)

(b) どこでその鞍をお買いなされた? (p. 21)

(2) 話者の心中のソ

その馬 (sono mūma) ‘[the horse] which you have bought’ (p. 23)

(3) 会話の当面の主題

(a) その馬 (sono mūma) ‘[the horse] of which we are speaking’ (p. 23)

(b) それは気の毒なことでございます。(p. 21)

(4) 少し離れたところのア

あれはなんだ? (p. 24)

(5) 見えないところのア

あの馬 ‘the horse you rode yesterday’ (p. 23)

(6) 新主題のア

あの大工は来たか? (p. 24)

これらから、指示対象が目の前にある場合、ソ系とア系は、話者からの距離 (近いか少し離れているか) によって対立する。そして、目の前にない場合、ソ系とア系の対立は、会話時の話者の心中にあるか、見えないものか (そこには指示対象を想起する場合も含む) の対立である。これらの対立にも、話し相手の概念はなく、いわば話者中心の対立である。そして、会話の主題という点では、ソ系は会話で進行中の主題であり、ア系は新主題を表すという対立がある。

以上から、第4版における指示詞の記述は、第3版の延長線上にあり、英語の ‘that’ に相当するソ系とア系の対立をより明確にしていると言える。また、『文語文典』第2版とは異なり、「話し手」の概念は希薄であり、また「話し相手」の概念がない記述であることも明らかになった。

5. 3. 2. 4 指示代名詞から人代名詞への転用

指示代名詞の改訂で際立つもう一つの点は、『文語文典』第2版の記述と同じく、新たに追加された語に語構成や語源の説明が付されていることである。その中で、コナタ・ソナタ・アナタの記述には、指示代名詞から人代名詞への転用が記されていて、第3版とは異なったものになっている。

コナタは、第3版にも『文語文典』第2版にも記載がなく、第4版になって初めて取り上げられた。§19では、コナタは、コノカタつまり‘this side’を表し、「一人称の代名詞 (a pronoun of the first person)」とすべきとされる。そして、話者を表すこともあるが、より広く、「二人称の代名詞 (a pronoun of the second person)」として用いられるともされる (p. 19)。

その他、§21でコナタ・ソナタ・アナタがまとめて扱われる (pp. 23-24)。その要点は、代名詞としては‘I’ ‘you’ ‘he’ ‘she’ ‘it’を意味するが、しかし、すべて二人称で用いられるということである。また、アナタは、ドイツ語の‘Sie’が‘they’でもあり‘you’でもある点が類似しているという (この点については、二人称の人代名詞の節 (§14, p. 12)にも記載がある)。

これらコナタ・ソナタ・アナタに関する記述は、それぞれの語の特徴の記述であると同時に、一つの語が、それ独自のカテゴリーに納まらず、別のカテゴリーの語でもあるという性質についてのものである。その意味で、これは、アストンが品詞分類で述べたこと、つまり日本語では一つの語が複数の品詞で用いられること、の一例と考えることができる。

5. 4 疑問代名詞と不定代名詞

第3版では§19 (pp. 13-14)が疑問代名詞の節で、ここでダレ、ドナタ、ドレ、ドノ、ナニが扱われた。それぞれの語の用法に関する説明は少なく、例えばナニは‘what’で、無生物のみに用いる、という程度である。

第4版では、指示代名詞と同じく、語根ごとに整理され、§23がダで始まる疑問代名詞、§24がド、§25がナ、に分割される。語根による分類と整理は『文語文典』第2版の記述 (pp. 70-72)を踏襲している。

§24では、ドレ、ドナタ、ドー、ドーズ、ドーカが扱われる。第3版と異なり、ドレの古形はイズレであることが記される (『文語文典』第2版p. 71)。また、ドーからドーズ、ドーカが形成されることが加えられた点も、やはり『文語文典』第2版に近い。

§25では、ナニとナゼ、ナニホドがいわば見出し語になる。そして、ナニノが縮約されてナンノになる旨の記述があり、またナゼを、ナ-ゾ-エに分けて説明するなど、語形変化や歴史的变化に配慮している。この点でも『文語文典』第2版との類似性がある。

§24ではドウゾとドウカに‘please’と同じ機能があること、また§25では、ナニがナンデスとなったとき、意味を持たず、英語の‘don’t you know’の機能を果たすことが指摘される。これらの語は第3版にはなく、また、談話的機能を記述に取り入れた点も新しい。

不定代名詞は、第3版では § 20 (pp. 14-16)、第4版では § 26 (pp. 29-30) で、疑問代名詞にカ・モ・デモ・ゾが後接することで不定代名詞が形成されるという点に変わりはない。ただし、第4版では、疑問副詞もまた不定代名詞になる（ドコからドコカ、ドコデモ）という記述が追加されている。

以上から、疑問代名詞の記述は『文語文典』第2版との類似性が見られ、また、新たに談話上の機能に言及していることが明らかになった。

5. 5 再帰代名詞と関係代名詞、他の代名詞的な語

第3版では、§ 21 (p. 16) が再帰代名詞、§ 22 (pp. 16-17) が関係代名詞の節である。第4版では、§ 27 (pp. 30-31) が再帰代名詞、§ 28 (pp. 31-32) が関係代名詞、そして § 29 (pp. 32-33) が新設の「他の代名詞的な語 (Other pronominal words)」である。

再帰代名詞として扱われた語は、第3版では「自分」「自身」である。第4版ではこれらに「おのれ」と「わが」が追加される。「わが」には説明があり、‘one’s own’ の意味があるとされる。『文語文典』第2版でも「わが」が挙げられ、この意味を持つことが記されている (p. 74)。

関係代名詞については両版に大きな変更はない。どちらも、日本語に関係代名詞はないとされている。追加されたのは、関係詞節に続くトコロについての記述で、「殺した人」「殺された人」を「殺したところの人」「殺されたところの人」と言うことができるとされている。これは、『文語文典』第2版に見られる記述 (p. 76) である。ただし、『文語文典』でその箇所直前にある日本語と英語の構文の違いを指摘した箇所は第4版にはない⁴。

新設の「他の代名詞的な語」は、内容が『文語文典』第2版に類似している。扱われた「ひと」「みな」「いか」「いく」「いつ」は『文語文典』と同じで、「両方」と「どちらも」は第4版で追加された。これらのうち、「ひと」と「みな」は、『文語文典』では不定代名詞として (p. 73)、「いか」「いく」「いつ」は、疑問代名詞として記載されている (pp. 71-72)。内容は、『文語文典』第2版と、例文以外は同等である。

以上、第4版の § 27～ § 29 は、『文語文典』第2版をもとに改訂されたと考えられる。

6. おわりに

本稿では、アストンの『日本口語小文典』第3版と『日本口語文典』(第4版) を、名詞と代名詞の記述がどのように改訂されているかを明らかにするために比較した。その過程で、『日本文語文典』第2版の影響も考慮した。

その結果、名詞と代名詞の記述には改訂には四つの傾向があることがわかった。まず、アストンの品詞分類(第2章)から、第4版の品詞分類は、第3版の分類を引き継いでいて、日本語の学習者向けあるいは英語から見た日本語の記述という性格を残している。また、この性格

は名詞と代名詞の記述にも見られる。第二に、同じく第2章から、日本語の語を分類するとき、一つの語が複数の品詞にまたがってしまうという難点があることがわかった。この難点は、人代名詞と指示代名詞の記述にみられる。第三に、名詞の記述と小辞の記述（第3章、第9章）から、日本語の名詞を、ヨーロッパの文法、つまり屈折語の分析の枠組みを脱し、膠着語として記述する傾向にあることを指摘した。第四は『文語文典』第2版に基づく改訂である。名詞と代名詞のいずれにも、扱われた語彙の増加や、語根や語源を取り入れた記述が見られ、それは第2版の影響と考えられる。

本稿ではまた、大きな改訂が加えられた指示代名詞の記述を詳細に検討した。その結果、内容は大幅に改訂されたが、基本となる説は第3版と大きく変わらず、指示詞の対立がコとソ・ア・カに二分され、さらにソとア・カが諸特徴によって対立することを示した。また、コの記述に「話し手」の概念が希薄であり、ソの記述に「話し相手」による特徴付けがないことも明らかにした。

【注】

- 1 主格 (nominative)、属格 (genitive)、与格 (dative)、対格 (accusative)、呼格 (vocative)、奪格 (ablative)、場所格 (locative)、具格 (instrumental) について、それぞれ「トリ (鳥)」を例にして日本語の格表示とその英訳が提示されている。例えば、主格は ‘*Tori or Tori ga, a bird*’ で、これは主格を表すとき小辞が用いられないか、あるいはガを用いることを示す。
- 2 アストンは「丸」を「丸い」の語基と解釈している。現代語なら、「深酒」の方が適例だろう。
- 3 この一覧表は、古田 (2010a: 217) が指摘するとおり、チェンバレンとともに佐久間鼎に先駆けて完成されたものである。
- 4 「花咲く山」は、英語なら関係代名詞は斜格 (on which) である。また、「デンキチという者」は英語なら ‘*a man who is called Denkichi*’ と受動態を用いる (ともに『文語文典』第2版 pp. 75-76)。

【参考文献】

[資料]

- Aston, William George (1873) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Third edition. London: Trübner and Co.
- (1877) *A grammar of the Japanese written language*. Second edition. London: Trübner and Co., Yokohama: Lane, Crawford & Co.
- (1888) *A grammar of the Japanese spoken language*. Fourth edition. Yokohama: Kelly & Walsh, Limited., Tokio: The Hakubunsha, London: Trübner & Co. Reprinted in Tōru Haga (ed.) (1997) *Corrected works of William George Aston*. Volume 2. Ganesha Publishing Ltd. and Oxford University Press Japan.

[論文・書籍]

今村志紀 (2018) 「アストン『口語文典』の改訂における内容の推移について」『上智大学文化交渉学研究』 6 : 25-39

URL <http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20180314023>

—— (2020) 「アストン『日本口語文典』改訂の影響：サトウの『会話篇』例文との一致から」『上智大学文化交渉学研究』 8 : 33-50

URL <https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20200310003>

加藤信明 (1986) 「アストン『日本口語文典』四版の性格」『上智大学国文学論集』 8 : 17-31

URL <http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000003318>

古田東朔 (2010a) 「コンアド研究の流れ (一)」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』

鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓 (編) 古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション第3巻 くろしお出版 [初出『人文科学科紀要』71 国文学・漢文学20 東京大学教養学部人文科学科国文学研究室漢文学研究室、1980年]

—— (2010b) 「アストンの日本文法研究」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版 [初出『国語と国文学』55 (8) 東京大学国語国文学会、1978年]

—— (2010c) 「アストンの敬語研究—人称との関連について」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版 [初出『国語学』108、1974年]

吉田朋彦 (2022) 「W.G.アストンの『日本口語小文典』における名詞と代名詞の説の発展—初版と第2版の比較から—」『城西国際大学紀要』30 (2) : 19-33

Robins, R.H. (1997) *A short history of linguistics*. Fourth edition. Routledge.

[辞書]

『日本国語大辞典』第2版、小学館、2001年

Nouns and Pronouns in W. G. Aston's *A Grammar of the Japanese Spoken Language*:
Comparison with the Third Edition of *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* and
A Grammar of the Japanese Written Language

Tomohiko Yoshida

Abstract

This paper compares *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (fourth edition), written by William George Aston (1841–1911), with the third edition of *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* written by the same author and analyses the transformation of Aston's ideas and descriptions regarding the following points: the organisation of his grammar, parts of speech and the descriptions of nouns and pronouns. Further, the paper examines the relationship between *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (fourth edition) and *A Grammar of the Japanese Written Language*. The results reveal the following. (1) The explanation of the parts of speech in the fourth edition retains the characteristics of that in the third edition, and the fourth edition also retains a trait of the third edition; that of being a grammar book for learners. (2) Aston experienced difficulty in assigning Japanese words to different parts of speech in European grammar. (3) Aston revealed the characteristics of agglutinative language in the Japanese language. (4) Finally, the important achievements of *A Grammar of the Japanese Written Language*, such as the description of derivative nouns, are incorporated into *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (fourth edition). Furthermore, this paper focuses on the revision of demonstrative pronouns and asserts that the system of demonstrative pronouns is the same as that in the third edition. In this system, *Ko* contrasts with *So*, *A* and *Ka*, whereas *So* contrasts with *A* and *Ka*. *Ko* is not clearly characterised by the concept of the speaker, and *So* lacks the concept of the addressee, which contrasts sharply with the explanations provided in *A Grammar of the Japanese Written Language*.

Key Words: Aston, *A Grammar of the Japanese Spoken Language*, noun, pronoun, demonstrative pronoun